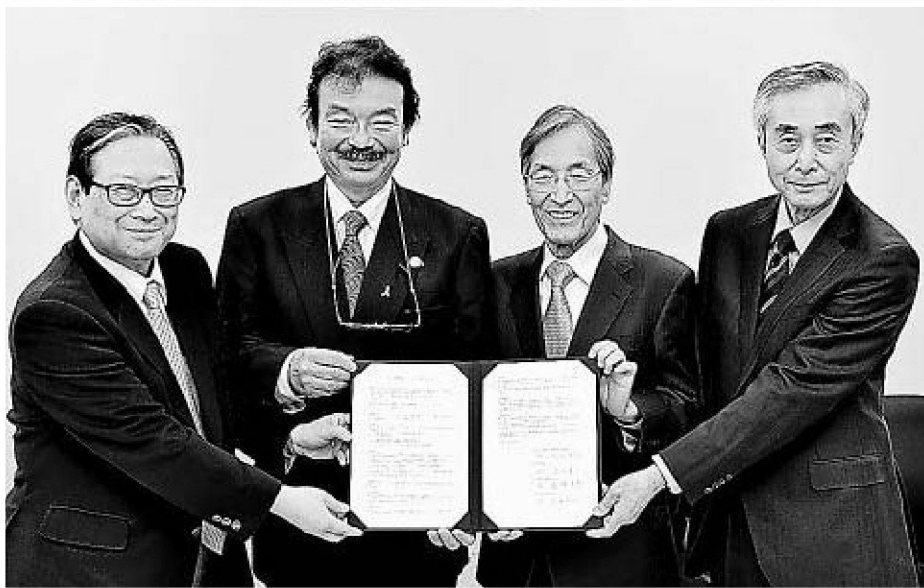


岐阜4病院、医療コンソーシアム編成



協定書を手にする(左から)吉田和弘院長、松波英寿理事長、富田栄一院長、
滝谷博志理事長＝岐阜市柳戸、岐阜大病院

実証データ相互活用

岐阜地域で急性期医療に取り組む岐阜大病院(岐阜市柳戸)など4病院が30日、病院間連携を深める枠組み「岐阜医療圏地域コンソーシアム」を編成した。4病院で病床数が約2300床となるスケールメリットを生かし、新しい医薬品などの実証データを収集・研究する「治験」に役立てる。同様のコンソーシアムの編成は全国でも先駆的という。(吉間隆博)

協定締結 新薬研究の治験に

参画するのは岐阜大病院、県総合医療センター(同市野一色)、市民病院(同市鹿島町)、松波総合病院(羽島郡笠松町田代)。

コンソーシアムによると、治験は、実証データの母数や質などが鍵となるが、国内では多くの医療機関がそれぞれ実施している。また、複数の医療機関が連携する場合でも、各機関の緊密度が課題となっている。

岐阜地域では、2007年から各医療機関が統一書式の連携パス(診療計画表)を導入するなど、緊密な情報交換の下地を醸成してきた。今後、参画病院の枠組みを広げること

も検討する。
協定書の締結式は岐

阜大病院であり、同病院の吉田和弘院長、松波総合病院を運営する蘇西厚生会の松波英寿理事長、市民病院の富田栄一院長、県総合医療センターの滝谷博志理事長が署名した。事務局となる岐阜大病院の吉田院長は「これまで以上に密接に連携し、最先端医療の開発や提供を進めていく」と述べた。